俳句日本

六七月合併號

第一卷 第十號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和二十年七月一日（毎月一回一日）發行

昭和二十年六月廿五日印刷納本

目次

俳句日本作品……一
開目鈔……荻原井泉水……八
新俳句論考（六）……西垣卍禪子……一〇
指針を記す（七）……中塚一碧樓……一三
選句錄……一碧樓選、井泉水選　卍禪子選……一四
後記……三〇

有隣亭蔵書

俳句日本作品

部隊の將としての氣持この人にある丘の冬空　福島一思

家近く歸り來しこゝの霜の葱畑　池田亜杜子

わが前冬木立てり父母の御前の如くにてこの日

こゝにて人々集る冬木さるすべり　眼ふごとし

冬山の夜明けながらの拍手打ち　山田宗作

兵隊間隔呼びあひふぶく

二月或朝の日ざし帽子を直し

楊柳いまだ冬芽で兵隊橋わたり

春燈消して寢れ家びと勝つ構へ　加々美青河

朝に溝ありて杜のほとり薄氷

石に乘る子供たち溝のほとり下崩え

雲から日させば壕一つ春の泥

雪ふる窓に對ひ眉目この人女子挺身隊　清水月丹

豆を煮る妻に冬の日に燃ゆる竈の口

黑い炭が俵一ぱいにあり餘寒家にゐて妻子

凍てしまる冬菜畑のこゝ人と挨拶をする

戰時われらが生活芹は水に溝に青めり

門前牛がゆく牛の影の霜旦　中原我樂

兒の顏ちいさく畦みちくる雪消えず

蕗の薹手にすそして兒に聲かける

卵の箱あけてみる冬日さす部屋のひと

わが家とりまいてある畦みちの雪ひかる朝

屋内深き壕があり冬を生きぬく　吉原東畝

爐ぶちに手をかけて男防空頭巾深々冠り

爐をかこむ戰意太い自在鉤は上より

寒椿咲くとみしふるさとわが家

ちさきみかんへあかりする雪がふる　今川溪花

日ぐれは日ぐれの暗いなりに雪降つてゐる

子供そこらを床板ふんだり冬の日

はたゝを食ふからだゐらしゐる

石段の觀音さまへは行かない池に雪ふり消ゆる

池べりをきし梅もどきまだ目に赤い食卓

寒氣どうだんの一株に羽ばたいて去りし小鳥

雪のみちまばゆく退院す流れはつきりあり　蓬莱鶯郎

軍馬去りしみやしろを掃くうす雪を掃く人
召さるゝ日を待つ郷軍となり霜白きになり　渡部嫁ヶ君

白々明けし川瀬かばらぎる寒の水音
雪明りの高原小松見ゆいまだ雪淺き　若林乙吉

土手燒きしあした通るとげたてゝ茨の實
寒は寒ゆるむ女車掌焚火の埃を肩に
雪に住む家の氷柱たれ灯せば灯のさす　細木原青起

部落およそ葱を培ひ家の廻りの葱畑
或は部落ひとみんな藁を摘む日あり海青し
落葉に少し音する栗鼠がこちら向いて
傾斜の麥畑で測量を終りあの空馬車置いてある所　宮林釜村

空いつぱい雪の屋根へ日出づ
冬土踏みしめたわが足跡大きく
寒波の中の家々畑にしづみて見ゆ畑黒し
燒けた一硯を手にし燒土に立ちて春草を想ふ

墓の文字大なり二月の太陽を背に
猫柳その一枝のわれに向つてのびかゝる朝
雪の上日てり侵入の飛機は一機
猫柳一つかみ置く綿厚い防空頭巾　九貫十中花

飛行服の四五人が歩く冬の日沙地清淨
いま冬の太陽あり體操するみな水兵
凍てつく家のものもの一つ野菜の手籠
麥踏みするみな無帽みな男の學童たち
雜木早春の日さし或時警備の兵隊が來る　南晴星

ふとくながく防波堤あり漁港冬の日
多摩川冬日四つ手網魚ちいさくかゝり
嗽ぐ烈寒の井水うつはに盛り
もくもく煙吐き汽車が胸もとに來る雪の峽間
雀ふくれて飛び木の間の奥へ家見ゆる雪朝　高橋晩甘

椿の蕾がいつまでも固い塚は少し深過ぎた
雪ふる野に杜が人家が遠くは見えぬ
空襲見舞の葉書のはしに書き春雪一句
梅の花さく山のべの萱は枯れたるまゝに枯れ
梅さく白い茶碗なぞ地に埋める　鈴木あつみ

祝福の日の大きいつらゝつらゝつらなり

云ふことが熟してくる赤い藷の皮などちらばり　秋吉碩田

弟妹ほゝゑみて二三歩の足を雪に　長男發つ、二句

父がこゝろ斷崖の日向にて話す蜜柑を頒ち　山田一艸

最後の敬禮をした姿を思ふたり動いてゐる冷えてゐる車内　會田明

雪は廂につかへさう疎開學童年一つとれり　平賀星光

決戰日本少女の顏が冬を艶かにする　加賀谷灰人

正月の樹木肅々と雪降ればなほ御陵の森　井田合水

兵とゆく霧の中朝のよしきり　稲垣一鳴

駅手白くいで征つ山が晴れてゐる　照井稗人

てりてはくもり岩のながれがあるおと　加賀谷宏

ぬまからひろがる風のぼたんゆき　關口比呂志

雪空にあれば奥羽山脈のつらなりみんなと僕　山木六合

青し捨てある葱の醫報出てゐる冬空　小川一灯

家のことあれこれと聞く栗の枯毬枝にひとつ　中村雨竹

雞の羽根のきれいさもふるさとの寒玉子で　秋吉碩田

枯薄を拓く私が一人雲二つ三つ　會田明

鎗にほどよき竹を剪り春蘭の蕾を見て　平田マサ子

飛行場の町々破れてガラス窓に朝日と笑顏　朝山九子

すでに尺霏々雪の積むこの地この目に知らず　井田合水

唐箕があらば粟を鷄の餌蒲公英のある　稲垣一鳴

山昏き鳥の雪雲去なうとて　照井稗人

きこゆ北陸の汽車雪夜生きてゐた父　關口比呂志

坦々輕し瀨々は冬陽きびしき足拍子　中山百姓

朧ゆく月吹雪間に間の灯みなたゆ　中原貞男

熟柿腹にうまかつた歸り淡々一歩　中村雨竹

などか別れみづみづし冬の芹一束れ（悼蛙柳君）　衣浦眞

みんな生きてゆく雪つきりの座の頬白松笠つゝくさへ

草に傷ふた鶯の啼き競りと駈けろ軍犬と　今井駅天

種しろの藁雪なくていつもの干菜汁　川口三角洲

疎開荷と冬居する壺だけ置かう　新倉三之介

疎開兒の小さき焚火けぶりあたりし　米倉勇葵

寒ン空の飛機遁げ梅のつぼみ　宇野豕鍬

なにもかもすませたやうな夜の雨雪になる
ひる月ともかくことし嫁もとり出征がありなど薬のふる　小川敬士

淡々として無想の線そは海上を出撃す　伴野龍

蕗の薹にがしその貌父のめでられし　佐藤鳴風子

春の草花のある机そこに毎日鐵兜おく　谷口一溪

日は島に沈む冬の内海の母艦　鈴木梅宇人

土をほる下肥の黄ばみ山の枯木　川津一之

面會所へしぐれに濡れて兵來る兵の母居ます　河合英觀

迎ひ船がわたしらのいま冬の獅子島の前を來る
碧居士に焚く沈のあるだけ早春惜みなし　藤崎麥村

海からの吹雪が灯りそめた
出でて月夜の雲のないところの星が暖い歳晩
なんと海へ描ける飛行雲が麥の芽の沒り日
深雪の春であるゆうひの白浪
雪夜熔鑛爐の火にうつるかんばせ學徒　田中井夢

きのふより明るい月がある港の船がある冬
ちら〳〵白いものがふると邊り一面ふつてくる野の橋
雪に日のさしておんまへの雪にせんせいせいと
雪のまちのゆききの日のくれる屋根のゆき
日がのびたことば境内ふるい石の橋がある池の水　鈴木折槇

冬の海、道が林を出たところに測量機すえてゐる
朝早い子どもと地震小屋が並び日のさすとこ
餘震遠くなつたことも月夜家のまはりの冬木
日の暮雪のちらつく入江に入れてくる海苔とり舟　高橋良太郎

雪に杉の葉松の葉まいあさ晴れる
雪おろすことに屋根のうへ星の出るまで
生マ木裂けて木の中まだ〳〵雪ふる
みゆき小暗くてとしよりの死をとしより來てなげく
もう能登山の雪かすみて見ゆ浪立つ

池原魚眠洞

誰が作つてゐるともない川原の青菜に日がさして冬
霜停つてゐる間の列車の下のぞいて通つてゆく
石、ころげまはるのがあられ
枯山は日あたり日のない小田は凍つてゐる形しばらく山中
枯山、村の煙學校の方まで靡いて暮れる

近木黎々火

どこも敵前ここら冬菜の畠朝の日
雪の中木に降りつむ雪の正月簡素
浮いて流れる雲に日の昏るる町
水の平らな月の明りを來て冬の野

古林巴水樓

冬海を前に鳥舞ふは岩根の祠
柿に寒肥を、やがて緑のラヂオが晝
田舟を置いて枯芦に弱い日のある水
陽が低くて浪音のする風の諸畠

佐々木石々

うめもどき貰うて榾火焚いて貰うてしばらく
雪へ雨ふる夜のわが行く灯一つさげてゆく
枯草まだまだ火にならで子の手ごごりを手に

鈴木蜻郎

寒夜のラヂオがしばらく默つたままでゐる一輪差しの花
兵隊と洗濯といつた風景が椿さいて小流
七輪で何か燃してゐて日ぐれ交番と枯木

小川都影

月が出て黒い木白い學校の坂になつてゆく
東京を外へ來て秋へ移りゆく雲の面會してゐる
遅れて一羽がゆくと山がくれるばかりの籐椅子
雨上りの海が見えてゐて秋、長い橋馬が渡る

橋本淳一

寒明けのあたたかな木の橋をわたり
雪塚の雪にのぼり防空頭巾のわらべ達
家は妻が中將湯煮る匂ひの夕べにして早春
屑の雪拂ひあうて空襲解除の吹鳴の中

原蝦煎子

月夜の鳥居がきのふからのお祭
毎日張つてる乾いてる張板毎日張つてる
山に住居して高い山の日ざし山ふところ
寒い鉦の音に日がさしてゐて樹の中

金井三良

雪より白い雲がきれ〳〵に樅の綠の强い光と風と
炭がま跡藷のたう雪の解けた夕日である
早春山から來た鳥の雨にぬれてゐる屋根
强い風が山を吹くと梢鳥とめて鳥の鳴く聲

井上一二

師走の溝川にごり家鴨など英靈おかへり
麥畑雨がほしい兵隊出てゆく國旗を立てる
手袋はぬいで手にふきのたう
それと解る旗ふつて暮れてゆく征でてゆく

木戸夢郎

少年山から、あとからも負うて少年雪ちらつく
大きぐうなづいて雪に足跡おいてゆく
病氣が無理を言ふほどの雪どけ
春といふものの三日月が細い枯木に

村上潮水

冬木並んで正しく生徒たち通ります
うす雪の朝の門までは掃いてある
雪空へ鐘が鳴るのもお寺の屋根のいろハルビン
足ばやにゆくロシヤ少女か垣根雪道

柳田流矢

これも大きな事につながる仕事手ぶいてゐる
ぬく日の背中のぬくみ朝廚をまく
お寺まゐりの防空頭巾草靑むとする

一日たのし水すまし水にゐる

杉田作郎

梅が熟してゐる先生のお宅へは裏から行く
稻は刈られて遠い高千穗の白雪
雲の形も落付いた初冬の水のいろ
芋掘り了へた靜かさはげんのしやうこ雨のふる

井手逸郎

春の日松根がま二つある其道にある道
こども蛙を釣つてゐる牛が子を連れてゐる道
月かげが火の見の半鐘月のかげのある道
春になつて炭山、炭がまの前にすわり

財馬呵歩

工場の裏に工場建ててゐる正月風の中
佛飯の湯氣もけさ大寒
梅が咲いてる雨やんでゐる
來る處まで來て麥が伸びてゐる

木村線平

英靈いま通らるゝ雨のやんでゐる靑蔬
この道まつすぐに行けと子供萱の穗とりに來てゐた
望東尼樣の折つておかれたままのやうな松の枯枝が一束
稻刈今朝から月があさになる山國

堀英之助

吐く息白うなつたと言ふ便りなども疎開の我子

雀雨にぬれてゐる葉裏の實の赤い寒明け　原鈴華

宿營丸刈にする兵の頭並んで雨ふる
兵火を焚く松葉掻く手の大きな兵隊
常ならばなほ美しき朝よ哨兵の目氷る　松宮寒骨

渚冬靄を行くうしほ匂ひ
をとこの朝霜に旗を立てし去らず
山なみかぶさつて雪の山なみ月夜
木造船の龍骨据ゑ終り濱の冬靄
降る雪に工場のひびき河をへだて　秋山秋紅蓼

すでに梅のかほるほどのあさあさとなり
人聲は梅のはな白き月夜
空には飛行雲の梅こそは白く咲きみつ
梅のしべばかりなる雨の降つてくるあさ
ここ燒跡の向ふから人の來る通りゆく　奥村四絃人

島島の話どちらからともなく絶えて火をはさむ
子等來て雪を掃き拂ふ壕の四角な口
連峯くきと暮れなづむ陣地の軍歌春めき　朝倉九鷲子

ほのほ長恨風と雪ともろに空空の
又も乘りそれ驛高架また雪の景言ふて　安齋櫻磈子

接戰吾ら靄の中青い蛙あり
薪山けふも松風の下にして燒く餅
あした息立つ茶飯をくふ山鳩の聲する
赤いかすりあるさゝげの種を播く素足近くに
絲を機に織る自信そのやう蕾持つ桃の木　大越吾亦紅

うちの祠に餅をあげる庭木の間行く
折り焚く柴の爐まむかひ末子も柴を折り焚く
だんだん覺てきてここにふるさとを描ける繪の前に立つ
旅をかへりてわが坐るところに坐りさて冬
雜木の雪山杉の雪山谷をへだてて月夜なす　伊東俊二

けふみがき鍊の配給煮て皿にあり少し缺けた皿
妻の手の荒れやうは云はず今夜ラヂオの落語がある
麻布一の橋から塔がある空このへん疎開してしまつた冬の木
段の上の門門の上の松朝月禪居庵一
音が杭打つのが遠くに見えてゐる野の冬雲　内田南艸

こゝに駐屯部隊船がつくと朝海照り出す
大雪の田につもり行く曉けのまどかな夢
冬は麓の家々朝の遲い陽がさす

街はあらつ風の雪固る鐵かぶと背に人々
冬は寺の道を通る匂ひない枯草

林雀背

つばきのつぼみふくらんでしづかにけふもくれる

細谷不句

杉木ますぐ松やゝ曲り間隔ある冬の日の日中
にんじんの折屑少し積んだもどり車の牛
お櫃入やゝ大きくてあさ〳〵娘妻
冬の日兎ら耳のさき血筋ながれ
凍日大きい枠のもの運ぶ馬が蠶ある

内島北琅

山に夜の灯が見えて窯の火に背中
窯の火窯をあふれ星空一ばいの星
窯に薪を運ぶ雪さくさくと火の明り
壺の焼ける火の音に我が子も來てゐて窯のぬくみ
殘雪あたりに暗く窯の火の音を聞く

喜谷六花

疎開の町寺大きく殘れるが甍覆ふ雪
この町筋の疎開廣し見透しに雪が晴れた淺草
雪搔くに霜圍ひの下の菜が青いかたはら
大きな泥蕪を髻を提ぐるやう藪路を來る
框に備への巻脚袢それらも寒が明けた日のけはひ

荻原井泉水

叔母七十五歳にして逝く

今は間遠な脈と雪しづくの音と
雪にとどいて配給のこれは人を燒く薪
柩ここからは肩に舁いで雪道足跡先き行きしあと
燒場茶屋の冷えた茶と藪に咲く梅の談もなく
火が、火ほてりがさめてゆく骨の色になる

中塚一碧楼

爆音眞上に來る家冬木のひかり
わがからだを感じつゝ海苔一まいをあぶり
飛機なくはしく話す梅の花を話すこの友
空大きく椿咲き辛夷咲きたり
部屋に刀一口あり芹汁をすゝり

西垣卍禪子

窓の朝青草みえてばらから罹災の誰かが笑ふ

罹災者を迎へ

春晝强風をうらむあれに會社の湯茶を接待す
務めしては彼岸のごまも少し蒔かうと思ふて机にゐる
勝手もとにみる生垣今年花もなくけふお花祭
濱にもきいて日中の籬にもゐる青々しささきり

開目鈔

荻原井泉水

毎朝月があつて明けきらないうちの必勝祈願　鈴木折蟹

「毎朝」必勝祈願に出てゆく、其の或日の朝、其朝はまだ月が明けきつてゐなかつた、其朝の作である。といふ氣持は「毎朝月があつて……」「朝けきらない」此の二つの文辭が續いてゐて、切れてゐる、即ち「あつて」の下にポーズがあるといふ意識を以て讀ませるからである。此のポーズ意識といふものは、我々の俳句の翫味鑑賞には緊要である。此の意識の鈍い人には我々の俳句は解らないといふことになる。定型の句に於ても、ポーズ意識は鑑賞の上に重要な役をしてゐるけれども、575といふ與へられたるポーズがあり、又「や」其他の俳句の特有の助辭がポーズを明示してたる。で、定型の句は一般に解りやすいが、我々の句は難解だといふことになる。世俗に媚びて、誰にも解るやうにといふことを目的として作るには當らないけれども、殊更に、世人一般を白眼に視て解らぬことを以て高しとする態度もよろしくない。此のディレムマが一つの句讀法を以て救へるものならば、句讀法を並用することは差支ないと考へる。此の「毎朝月があつて」といふ句には、コンマを用ひてないけれども、「月があつて」の下にコンマのある氣持を以て讀まなくては、此句の味は鑑賞されないのである。

きらめく星へきらめく星のぼってうるはし雪原　大越吾亦紅

冬の空氣の冴え〳〵と澄んでゐる氷のやうな透明度、其中にかがやき初める星のきら〳〵とした燈火のやうな光度――空氣が透明である爲に天上にある星が大さう地上に近い感じであつて、原一めんにばらまいたやうでもある。で、此の原のひろ〳〵と、殊に雪を以て靖らかに蔽はれた「雪原」であることが玲瓏たる感じに感じられる。地上のものが宛も天上のものであるかのやうに感じられる。この感じを云ひ定めたのが「うるはし」である。かういふ形容詞は、俳句の中に入れて、とかく蛇足的になりがちのものだが、此句に於ては反對に、この「うるはし」といふ言葉が此一句に生命を與へてゐる。

前のお墓にせなむけて拜むお墓が冬　財馬呵歩

墓と墓とが小さな通路を隔てゝぎつちりと建て詰んでゐる、どの墓のしきみも枯れたり、散つたり、あかの水は氷つたり、涸れたり、そとには落葉が散りかゝり、土は霜に荒れてささくれてゐる、と云つた風な墓地の冬のいかにもしやう〳〵とした中に、自分の家のお墓なればこそお詣りに來て膝を折つて拜んでゐる。その人も亦、寒む〳〵とした一點景ではある。だが、それだけを書いたのでは、きはめて尋常な感じ方である。「前のお墓にせなむけて拜む」――此の氣持を出したところに此の作者の新鮮な感じ方がある。墓の前の墓は、家並で云へば「お向うの家」である、が、どんな家のどんな人がはいつてゐるのか、こちらの墓に詣る人にとつては、何の關心もないものだ。背中を向けても尻を向けても「ごめん下さい」とも思はない。それが賞りまべでもあるが、こゝに人間

社會の淋しい眞實がある。だが、此の感じが、主觀的に取扱ひ方感傷風のものにもなる。その當りまへさに客觀性を與へて――詣る者自分をも含めて一つの風景としたところに此句のよろしさがある。

ほし大根も島の家家ゆうひになる　船つく　池原魚眠洞

かういふ風景の句はいつの時代に於ても本格的の味を失はない。昔の言葉で云へば、「不易」の味である。だが、不易の句は舊く感じられがちだといふことも、昔から評論されてゐる。だから、かういふ句には、表現のあざやかさといふものをもつことが肝要である。あざやかさとは一方には、取材の取上げ方の新しさである。さうして一方には表現技術の冴えである。つまりあざやかさとは、新鮮の「鮮」であり、鮮潔の「鮮」である。此の「ほし大根」の句は、「ほし大根も島の家々」といふ描寫があざやかに冴えてゐる。島といつても大海にある島山ではない、平野の近くにある平らな島で、半農半漁の生活に惠まれてゐるといつた風な、此の「ほし大根も島の家家」だけで、昔の連句の付句としても面白い句として味はれる。それが「ゆうひになる」がいゝ。一日は夜の一日とさしたる變化もなく、朝は夕とさしたる變化もなく、此の日も靜かに夕となる平和な一天地である。さうした一天地へ今、陸から來た船がついたのである。その船は、島に歸る人と島人の生活に必要な僅かな物などを陸揚げして又靜かに離れてゆくのだらう。「船つく」は、此の平和な風景に一つの活を與へてゐる。こゝに取材の取扱ひ方のあざやかさがある。

手の平にして小さなおかれの浮彫のふじさん　三好叢一路

ほゝゑましい句である。其と共に、其のほゝゑましさの中に、「よろし、これだぞ」といふ氣持も亦感じられる。「手のひらにして」といふ言葉は、手の平に載せて目をとめて見る氣持だから、平常の錢の取りやりではなく、新しく出來た貨幣を、おゝこれが新しい一錢のアルミ貨かと手に取つてしみ〴〵と見入るところである。見ればいかにも「小さなおかれ」である。貨幣もこんなに小さくなつてしまつたのか、と思ふ心には時局のきびしさが感じられる。さうして、此の小さな貨幣の中には、見れば大きな富士山の姿が浮き彫されてゐるではないか。おゝ、我國の富士山！此の山の嚴然たるかぎり、……、といふ一億の決意が、此の小さな貨幣の一つ一つに刻印されてゐるのだ。新しく出來たばかりの、白雪のやうにピカ〴〵と光つてゐる「小さなおかれ」の「うきぼりのふじさん」は、いかにも美しく、又、貴いのである。因に、「うきぼり」といふ言葉の正確さから云へば、是は鑄造したものだから「うきぼり」とは云へぬ譯だけれども、その美しさを賞でたる氣持として、「うきぼり」といふ感じは間違つてゐない。

働く窓に日のあれば梅の咲くを見る　秋山秋紅蓼

この何げなさをそのまゝに取り上げた氣持、これが本當の俳句の氣持である。俳句を作らうとする氣持、俳句をさがしまはる氣持は、本當ではないといふことが解る。此句の「働く」は、働くぞ、この時として働いてゐるのだぞ、といふ風に、意氣込んでしてゐる「働く」ではない。勿論、時間と命令にしばられて仕方なくしてゐる「働く」ではない。働くことが極めて自然に、木が葉を出し花をさかせるのと同じやうに自然に、其人

の生活になりきつて、其人の身の動きが其まゝ其人の「働く」なのである。さうして働いてゐる傍に窓があり、窓がいつしか春になり、春らしい日がさし、そこにいつしか梅の花が咲き出してゐる。おゝ、梅の花が咲いたな——と、自然に目をやる氣持、風流心の何のといふことではない、だが、これが本當の「風雅」といふものだと思ふ。

新俳句論考（6）

俳句の世界に就いて——基礎論（終）

西垣卍禪子

律意識と完體

第三には、この「意味」から表現の體系を單に生から離れたる形式とせず、それを形式と內容との具體的統一に於いて確說し、この體系的全體はむしろ生命的全體でなければならない。そして、全體と部分とは、相對的に分析されてはならない。あらゆる實現が純粹に直觀される本質の對象への全體的統一であり、それの反省が順序性を持たなければならぬから、順序づけてみられる具體的實現のある段階に、その實現（表現）が部分として概念されるのである。それ故、部分は全體に向つて限られたものであるけれども、必ずしも小いとはいへない。直觀される全體、それは本質を追求して完結をよろこばない實現の體系であるが、それのうちの反省がみづから我を限るとき、そこに部分としての現實（作品）が完結するのである。つまり、反省の働きとしての概念の順序に於いてのみ部分が全體に向つて考へられる。部分が始にあり、それが集められて全體を作るといふやうなものではない。自覺する純粹直觀の反省に於いてのみ全體に於ける部分が概念されるのである。從つて、この全體は反省的統一である。

表現とは生の機機に於ける外化の方向である。即ち生の客觀化とも呼べる。生命は自己自身の中に無限なる內化の傾向とともに、無限なる外化の傾向を藏する。最も緣なきものと見ゆる外物も體驗に引込められる可能性を有するとともに、意識の照し能はぬ深き內奧も表現に顯はれる可能性を有する。生は自體に於いては一の精神的物理的統一である。意識の諸狀態は言語、身振、顏付などの內に絕えず自己を表現するのである。

（註）かくして、俳句する行爲、無限絕對的生命の表現とは、一はにいへば、自覺する純粹直觀みづからに於ける反省であり、この反省に於いてこそ、實現そのものの認識——ポエジイは成立つのである。つまり對象としての美が表象される作品に於ける、表象される美の表象に於ける純粹性を考へてみる時、美を純粹にするものとして働らくのが反省であつて、それは個の純化である。從つて、反省は世界認識を場所とするから、實現一般の方法を基礎とする。而して、この自から發展する純粹な自覺は、我に於いて我の根源を見ることにより、あらゆる意味實現を組織するから、自覺に働く反省は、本質に於ける意味の認識である。俳句律に於ける知性の徹見とはこの反省の働きをいひ、俳句（藝術）に於

ける認識である。我々はこの認識をポエジイと稱し、個の純化であり、我を捨てる事を第一義とする無我の靡鏡である。

以上、新俳句藝術構成の基礎からは、新俳句の生命の表現は根本體驗による人生的價値の把握を意味し、生命の體驗が當に與へられた特殊より全體へと進むところより、生命の範疇(世界)として、最も根元的な優越なる意味の範疇が與へられ、生の部分の全體に對する關係を表すのである。從つて、生命の體驗のこの動的統一は外的形象に於いて中核的表現(結晶性)を取る必然性をはらむ。

かく、我々の精神生活の構造は、それは俳句の世界は、生の統一體がそれがそのうちに生活する環境によつて制約され、更にその環境の上に作用しかへし、そこから生ずる內的狀態の編制(根原的統一)である。又、精神生活の基本的編制をなす部分と全體との關係は、「合目的性」を擔ひ、生の經過のうちにこの合目的々關係は內在し發展するのである。そして、全體は要素の單なる總和ではない、要素そのものが生ける現實態としての全體から何らかの操作によつて抽出されたものに外ならない。

かくして、我らの實現學は俳句現象の根本學であるといふことが出來る。尤も、この學も亦實現の一つとして、純粹直觀の根源に於いてなされるのであるから、純粹直觀される本質學をイデアとして要求すべきである。けれども、かかるイデアの本體、今この絕對的生命を俳句性とするなれば、それは本質學として形而上學的直觀を方法とするものではあるが、さればこそ、實現學の論理に於いて、俳句性の本質學は完結せず、無限に追求されなければならぬのである。ここに於いて、我々の俳句(現象)の本質、絕對的生命(俳句性)を追求するといふことは、ただ「實現」に於いてするより外の方法がなく、我々は現實のなかにあるのである。否、俳句する我々の行なひは、すべて現實(俳句作品)であるといへる。

然し、今の現實(作品)が次の現實(作品)を精進發展として構成すべきならば、現實(作品)を實現(俳句表現としての秩序)にうらがへして、その現實(作品)が內容としてゐる意味を、純粹な本質(俳句性)に向つて、即ち、對象(美)——絕對的生命)の論理によつて、認識(ポエジイ)しなければならぬ筈である。ここに於いて、我らの立場の實現學は、論理學ではあるがかかる實踐的要求から產まれるものであることを知らねばならない。即ち、俳句性問題に於ける我々の態度は、定型俳句や舊自由律のやうな與へられた現實(作品)の分析でなくて、行ふ實現の組織(俳句表現としての秩序)であらうとして、我々生活希求の反省(本質的價値の把握)が一つの純粹な實現(俳句作品)であることを確信するものであり、藝術は技術であるが技術は既に藝術ではない、といふ反省的統一の意味の意味表現にあることを又知らねばならない。

(註) 俳句表現の小形化は「純粹」或は「純化」に根源する。俳句形態の短小性——それは表現の壓縮性であり表現の消去でもある。かかる形は論理的な明晰と感性的な明晰とによつて一致し兼ねられてゐる根源である。この關係こそ俳句の結晶性、或は俳句が部分をいかに無數に集めても、それの綜合から全體は知覺されなくて、ポエジイの全體としての意味を知る方法はただ純粹なる直觀にあるといふ根據である。

絕對的生命(生活希求の投影)は實現(表現)によつて始めて實在の意義

を有し、イデーとしての、それは實現のための準備としての模型にすぎぬとはいへ、この理念を構成し得ることは、現實的生命の中にそれを實現し得る可能力を有するがためである。そこには創造の手續が要請され、その手續とは選擇價値の表現（理想の顯現・反省的統一の表現）にあることは既述した。

かの俳句に於ける消去の表現の意義は、この選擇的價値の純粹表現といふ藝術行爲の本質的意圖を徹底的に端的に實現する仕事を果してゐることである。選擇とは、無限の現實性、可能性の中からの選擇を意味するもので、俳句の言葉を極めて惜しむ卽ち消去されたといふことは、殘る空白におく意味によつて、選ばれたる言葉を生かす藝術の意味である。然し、この短小性なるが故に價値ありといふ意味は、完了體としての全體を意味することでなくてはならず、從つて、短小形體は內容（根原的意味）に歸屬した形成であること勿論である。俳句の完體とは、却つて省略ではなし得ない別の形ち卽ち緊張體系の表現が完了されてゐることであり、完全なる全體としてそのまま具體的な形態として成立してゐるもので、卽ち、形體は小であつてもしかも全體的完成を持つもの、「具體的小」として成立してゐることである。これ根本體驗の動的統一が外的形象に於いて中核的表現（結晶性）を取る必然性の證左である。

——終に參考書を列記し深く諸師に敬意を表するものである。兒山敬一氏著「力法性の哲學」山際靖氏著「日本美學への理念」

傷痍勇士の句

——指針を記す（七）——

中塚一碧樓

蒼天日々われらが焚火のけむり　島林庄作

蒼天へ立ち上るわれらが焚火のけむり、これはそも何の表象といふべきであらうか、日々蒼天である事、われらが火を焚く事、われら大自然と共に生き、われらの五體に力滿つといふやうな感じである。表現簡にして佳、堂々たる一句といふべきである。

これら闘病のくらし大根の葉が大きい　島林庄作

病と闘ふくらしの中に、田畑の作物に親しみ融和してゆく虔しい心持である。作物の中でも殊に作者のこゝろが大根に向いてゐる點は大いに頷き得る處であつて、「大根の葉が大きい」と、ずばりと云ひ切る事、感じのまゝを如何にも直接に何も構はず言ひ表はす事、これは吾等が「新俳句」のいゝ處の一つと云つてよからう。

單衣著てゐる傷兵の配給の丸い梨　谷口矩良

いま、傷兵のみんなに配給された梨について作者は宛も子供のやうな素直な喜びを感じてゐるのである。或ては子供の心以上に澄み切つた心持にゐるのである。單に美味さうな梨を感じてゐるのではなく、作者は

「丸い梨」を感じてゐる。そこに詩としての味はひがある。さう云はんでも梨は丸いにきまつてゐるものだ、と云ふのは所謂卑俗な分別であらう。更に「單衣著てゐて」と云ふのが、この丸い梨を感じる事に最も適ふた境であるのが思へる。感覺の優れた一句である。

蕗の薹萌えてこゝ機關銃座によき位置　齋藤達也

そこら長閑な景色に蕗の薹がずつと萠え出してゐる明朗な空氣である。作者はこののんびりとした中に在つて、思ふ事それは實に「機關銃座によき位置」といふのである。再起奉公の念ひは如何にも鮮かに躍動してゐる。「位置」は一寸妙な表現の言葉に感じられるが、此場合至つて適切に一句を生き〳〵とさせてゐるやうである。

癒えて征かんを梅の蕾のかたし　日下丑松

作者は梅の蕾に共感して、病癒えて再び征かんとする心の張りを感じてゐるのである。かうした情を持つ事は卽き過ぎてゐるとか、之はありきたりの心持であるとか云ひ切るは當らない。この心持はすぐれた心底であると思ふ。

「かたし」の思ひで一句が起つてゐるのも喜ばしい。

仔馬にたてがみあり青草を駈けるに　村上幸吉

思はず微笑を感じる一句である。仔馬にたてがみがある事それは如何にも可憐であり、云ひ知れぬ親しさを覺える。それが今、青草の中を駈けてゐるのである。そのあどけなきものに對して誰か快感を持たないものがあらうか。この靜まりの心持に在る勇士にして再起の秋、如何に途に至誠盡忠に終始される事であらうか、誠に頼もしい限りである。

國を思ふ人々に桃の實の青し　土屋國男

決戰この時の人々、一人一人みんなが愈々國を想ふてゐる。祖國日本を念ふてゐるのである。傷痍勇士の方々が更に熱烈に國を想ふてゐられるは言はずもがなであつて、桃の實の青いによつて、その國を念ふこゝろと桃の實とが相照らし合つてゐる境なのである。じつと落着いた心の確かさ、こゝから我が日本が云ひ知れぬ底力を持ち得るとも云へるであらう。

我れ水仙を活けて時をまつなり　酒井兵一

之はまた如何にも率直に、ずばりと云はれたものである。明確、簡潔、甚だ愉快であり、ぢかに共鳴を覺える。古人も「句はあまりに巧みたるは卑し」といふやうな事を云つてゐるが、巧まざること斯の如くあり、まことに贊成である。

素燒の鉢買うて貰ひ櫻草植ゑて貰ひ病んでゐる　加藤黛杉子

これも素直にそのまゝを直叙されてゐて些の嫌味のない一句である。此場合「素燒の鉢」そのものが僕たちに或る親しいものを與へてくれるやうであり、植ゑて貰つた草が櫻草である事も甚だいゝ感觸である。「買うて貰ひ」「植ゑて貰ひ」といふ重なつた言葉つかひも此時の純な心持に却て協つてゐる調子のやう感じられる。何のわだかまりもない快い一句である。

選句錄

一碧樓選

○

寒うちかくまでの日ざし雪原　長谷川杉郎

糧ひくあしどりさだかなる雪へ照る月

風呂吹煮える爐を領してわが子

門口雪除けてあり息子が兵隊になつた　相澤華芳

老いし母在り寒の水汲み滿たす心持

一隊一隊冬の川見えるところを

をとこ大きいからだ鱈舟をあがりくる

極寒荒原が向ふは見えない　星野武夫

家の奥に青い笊の中まだあるこまかい餅

旋盤の技術未熟ときに冬草をふみ

冬の日厨に焚くこれは近くの山の笹の葉

三國屋白省

寒夜月夜の國土にてれむり得る感謝

神あかりしてくるへ立つ地上に冬木を

冬木へせまるかんかく通りすぎたり　林鶯水城

食卓一鉢が菜漬けさ木花した

筐は影す雪の上雪みちなく

忠誠われらつらゝてる陽である　伊藤彌太

朝の畫室の暗がりの椿の苦がかたい

畫架あり鐵兜あり八手花咲くわが家

椿一枝を折りそのやうな海べ一日　守矢自由也

雪あかり夜の人影ありて神の大前

冬朝乳しぼる山羊にもの言ふ少女

機關銃隊が渡る湖の一枚氷　今井六石

陸奥阿武隈川の瀬のこして凍て雪の廣い田

箱の一つに餅いつぱいある家にやどり雪雫きく

備へて春夜を暗うするに大き星一つ出で　根岸榮一郎

栗一つ一つまるはす吾子とゐる宵

井戸水溫い背戸の柿の葉露しづくして

遠景冬の日の町日々一つの窓の大いさ　竜田眞魚

たしかに鳴いた一羽の鳥が去り二月家並
飛機去る地上二月のひざし小石を踏んで
木々芽吹く道を人のあとから歩く私の祈念

佐藤泰弘

寒さゆるむ木船工場の眞正面からはいる
ふゞく夜馬は星ある顔を向けわれに
氷張りつめた河のひとゝころ河水

吉岡南呂

冬日に來る牛の足の藁靴が汚れてない
麥に雪降り親からもらつた丈夫なからだ
野川と空青い我れ諸をさげいもおもたい

吉澤稻市

畦をあるいて來る首卷が父
冬の日父のすがたを聖護院大根まるく
父のあるいてゆく方冬の日の山の中

瀬尾一風子

畑野枯れつくす風にさからひ樹負ひ連るゝ
冬ぞら相模野に尖れる雪はだら大山
ずつと霜枯れの畑みちを來たきゞ拾ふとるはゝその木谷

黑丸古生

寺の棟くろし風花とぶ眞壹の人々
山の雪降るその雲つゞいて山の遠い
抱いてる子供の雪帽子夕ぐれの街頭

沼文生

雪深けれ雪にみちあり野の宮へまゐる
沈丁花匂ふにも思ふ身は鴻毛より輕し
藪木花つけて動かずこゝへおろす長柄の鋸

山田不雪郎

梯子が屋根にかけてある雪の日にかけてあり
猫柳が包からすこしみえる蕾つぶつぶ
爐端に卷脚絆をとるけふの日の空襲

近藤紫村

雪ふりやまぬ家に冬菜をきざむよろこび
人ら焚火すこどもは凍土を踏みつゞけ
爆音をきく芹は摘める青さ家前の溝

加々美絹子

このへ一帶の客土に降る雪
熟練工と並んであるく雪柔か
つけ〳〵と物言ふ小母さんに濡れ雪

堀川屈人

冬木やたら切る小枝を揃へ積みたり
山薄雪雲少し動く農家點在
宮の石段中途からそれて畑の大根日かげ

林さあを

鱈を打ち碎き潮ゆら〳〵をゆらぎ朝日
鱈打つなり岩一つ潮きてうごき

飛行雲高し冬椿谷に咲くに立ち　後藤零丁子

國を守るこゝろ地に立ち柿の木冬芽あり　木暮羽六

地のしめりをがんじ鑓射ちの姿勢になり冬の日　相場汀石

一兵おとうとの便り薔薇冬の花咲きたり　渡部湘雨

庭に小鳥が來て二三度來て春寒し　佐藤禾實

國戰ふて葱畑見えて葱のうれ　三雲城東

人と話す庭凍て庭隣あり　澤渡尚之

人ひとりの冬日椿は青し　

國護る冬の空晴れてゐる會議室にゐる

スキーで歩き横に歩き遠く藁乳穂

あながち鷄飼ふ氣持早春その地面

家からみちつける雪踏みていつも日が高いこゝろ

枯れた山の頂の徑が見え街から見え晴天

樹氷美し今朝しかと机による少女

雪ふりて兵船見えず渚に傾く青い岩

簡素なり寒菊挿して住む部屋

葬めき咲ける寒菊に久しき水をやるとする　口田朴也

疎開人に若水ありて井戸深くこの水

くきも大根も漬けて征きし子に書く　渡部傘露

あ子おもちやの數あれば二月ある夜の父に寄添ふ

車上身のいたみにたへん車上雪晴るゝ朝（病みて）　松宮磨研

供出米完納藏の扉を閉めて冬の日

わがいのち畦に薺を摘む少女も摘む　島林生作

冬の雲遠し兄の姿見えず見おくる

今朝梅を見たこゝろ窓あけて見る山　永井はるを

冬枯土手のむかふわづか見え兵舎の黑い屋根

庭木に赤い實がなり男日ざしへ歩み　藤田三六亭

雪負ひ出るをみな川土手高い

雁木が凍みすべるところどころ夜の聲　井上佐久良

氷り場氷切りいだす如月冴ゆる朝の道筋

雪深し手に雪を握つて居て飛機見る　新田巢州

山に向ひてつどひ山定かならず工場の冬朝　谷桑水

工場夜業の火の明々とむり月影をふむ　平井青三

すこしは餅を搗く雪やはらかく厚く　今井四露史

潟のうすあかりに下りるかいつむり黒い鳥　金子曙山

どれも冬木がふとく山川瀬鳴りしてながれ　松原颯々

北は藪だゝみどん〳〵と焚火　齋藤達也

測候所の空がまだ早い春の日　宮坂岱風

私まがつて通る日々風速機春となつて　平田雨衣

彫り上る印が愉しい氷柱のしたゝり　佐藤豁山人

寒餅を桶に浸す夕べ風ひゞく松の木　永田禾陽

雪眩し肥取る橇つゞくをんなもひく　菅木葉

牛小屋へみちつけてあり雪の日親牛仔牛　村上幸吉

故郷は遠ぐして雪を掃く　秋元櫻水

師と語らひてこの夕干柿をいたゞき　牧野秋風嶺

更に張る心朝に寒水を飲む　佐藤西邑

深い谷に向ひ行く遠山の雪白し

荒雪どこでも歩く寒くない身形

雨の窓明るき作業檢出を警告す

穭生きてゐる雪の片影をとめずこの日

藁鳩大根の鳩低く雪ふりま木をつむ農人

飛行雲を追ふ出勤の朝の凍てし大空

警の言葉だ凍てた手脚に觸れず

冬の日狹きところに在りて一人の女事務員

歳晩警報一家着慣れしこれの服裝

母にあいさつをする軍帽に粉雪

松林ひくゝ冬の鳥一方へとび去り

寒山の麓に住み遲しき老の人らを見たり

雜穀供出の橇の俵吹雪きては晴るゝ

海とゞろ寒風の朝をまつしぐら征く

部屋から見る裸木せんだんの實

雪かさなかんじ夜の子供とあり

このとき裸馬にとびのり山こほる寒さ　伊東秋蘿

椿の花咲く路に馬糞を拾ふ私と兒と　宮崎無明

學徒ら機械の音の中から出て來て梅咲いてゐる　佐藤かめ雄

ごむ長靴の足冷ゆるその足を持つよろこび　中村昌作

決意冬陽を背に坐して一兵　大淵青柴

春の雪ふりてこんなところにあつた墓場　工藤折葉

花菜畑うらうらこゝから海へおりる道　高橋安榮

道義日本にして山べはふぶき　下平天耳

鄙の子たちが雪の戸口が荒壁　

凍夜月に動く出陣の隊列の動き　

行軍夜の雪みち水筒親しき水音　

吹雪止みてゐし垂氷に光ありて明ける　

雪窓二つ雪とけて二つの窓に立つ冬木　

極寒槻の木あり星座がありこの夜　

雪ぎち〳〵する午後は獵人のこゑきこゆ　

防空服裝肩にして少女庭に殘る雪　瀧浪龍雄

畫炊きす沈丁の枯枝ぽきぽき折りし　長谷川十夜

木あり水あり僕こゝに炭竈を持つ　二宮香芽子

水仙花ありうすい陽の直射　二宮秋歌樓

女人石壘にくる秋の日のよろこびにして　中島一風子

霜の道を行くすゝき搖れる方へ行く　西村嶋吉

寒明け麥の畝が正しくてもう畫　渡部東迷路

墓山新年の陽ざしの靄ふんで行く　有米飛路

接骨木が根の凝雪おのづとまるみをおびて　二宮貞

山々雪の山夕陽にかげり山肌　大榎生

雪道走つて來てはもの言ふ子供

朝々通る同じ人同じ歩調で冬日

繩綯機の音のもれ來るわら家の雪降り

子供捨てゆきし厚氷すこしづゝ地にとけはじめ　浅野一草子

○　卍禪子選

殘雪の石段梅開くに遠く　加藤迷々可

庵堅くとざされ雪へ雪解の雫　山木六合

竹に雪瓣殘りこゝも戰つてゐる空　高取芳春

われに意圖あり胡麻一摑は袋に入れ置く　小川一灯

まづ宮城へのみち重い荷のお上りさんで冬の日　戸田まゆみ

母に添はれて踏む落葉の音もひさびさの　戸田みゆき

あの枝に生つてゐたのを知つてゐてむく蜜柑　菅壽吉

少女毬つくあとさき綿虫舞ひ夕風　林田照子

梅見るには少々早く石など蹴りゆく　池田穂次

吹雪く額は似つかわしくも防空頭巾　安田默川

咲くになほ旬日の梅林の私の淡い影　峰松春風子

雪霽から鈍い陽が悠々歩くは二羽の鶴　岡田初繍

瞬く灯のあつて冬の海へ眞直な道　米倉勇美

爆音幼き子等としばし膝に折鶴　宇野豕篠

飛機雁行春近う街は萬歳　伴野龍

必勝の春のあしおと道に聽く　森谷こ山

戰ひのきびしさを朝々身につけるものをつける

ひとり征きふたり疎開した膳にひとりわたし子でゐる

暮れはやい道のあとさき水の枯葦　小川敬士

群星水に水のまんまんとながれ

航跡あわたゞし操縦桿に力を籠むる

村落日々あるく春土やはらかく

潮よせ來潮くだけよ春まひる

寒夜わがまへをゆく一兵卒も光つて居て

その中のひとり氷田をよぎり校門へまつしぐら　佐藤鳴風子

夜の警報に馴れて頭巾の瞳やさし　澁山乃武

一燈にあつまり縫ふは縫ひまどかな春夜　松村傘松

殘雪のよごれ小溝に草生ず　南畝三坡

天譴畏み寒燈さらに〳〵寒し　坂元呑空

ガジマロの鬚根がさゆらいでゐるあまかぜ　谷口一溪

爆音寒し椿の花赤し雪晴　上條無庵

敵機頭上にあり雪の月を感ず　鈴木梅宇人

むべ山と繩をなつて塞げた北の窓　鈴木長司

ひとり起きて居れば椿の葉のひかりびるから　川津一之

南なみのゴム靴無くも草藁沓暖し雪ふむ　井出合水

空襲夜明けたり平日と變ることなくて冬日

大工なか〳〵に矢張闇値を言ふか雪　稲垣一鳴

雪を幸ひ米鬼血色をよ雪に體當り　

頸城野のつらゝ地平にくつぐといふで　

いよゝ洩らさぬ灯の母と寒九の話　

雪國雪の雲子らは喃々暮れて　

思へば明るき灯の寒の波たゝね　關口比呂志

カラ凍てまだき湯氣沸くかげの水仕の子供　保科滿藻流

知らず力す薪割る手眞向きに吹雪く　伊藤柳江

空襲閉めきつて薄陽疊にうつり　

斧を休める割木の膚白く木の香する　中山百姓

白い壺撫でてはみいくさ中の眞向き　北原胡椒

兵に殘陽あり寒風の吊橋傷兵杖し還る　伊藤水穂

凍雲うごかれ干枯れ麥の畔あるくにて　中原貞男

座は寒錆び薔薇一輪斷れ雲ときをりの雪　伊藤不二蘭

しばし落雪根切れ赤松コダマして行く　森抱葉

あたり草の香蛾潰しつぶし曠野の火焚き　衣浦眞

サイレン趁ふはさらに霜朝悠久の陽を　江島雨煙

曉の爐火あか年をかかぞふ椀や凍て皿　今井默天

風きは立ちの物ぐろきうみと舟べの人ら　川口三角洲

瞬の爆音冬の雲なくて彈幕　久野仙雨

野末遠くチラ〳〵冬日友軍機ゆく　濱名白香

冬陽廻りたり落ちんとす大欅たつ　英吉更

餘寒風鳴らす友軍機の爆音が響いてくる　三輪橘城

勵まし征たせた家ぬち炬燵もだんまりつゞく　平賀星光

縫針がチカと光り古松葉散る短日　加賀谷灰人

猫柳へ犬と子供が雪靴で來る　池上澄江

車内春になつて朝交はしてゐた挨拶　朝雪かたまり喪の列にまじつて行く

朝の旅立ち霜のゲートルをしつかり卷く　鎌倉白羊城

煙が朝の冷えるだけに明るい街　照井稗人

陽は遮るものなく丸い雪の山形ち

神國立春の日炭燒く山は晴

欅の雪明りひるからの暖い雨

川を越すと村のつまごの子たち

雪明りの水もそなへて君が護國の人となられた日　加賀谷宏

冬が來た松の枝ぶり

子供おとなしくして正月床の間　佐藤大峰

烏爪二つ三つ窓から冬晴れの畫　鎌田一相

粉雪窓をうつ母が讀む南の戰況　大野かつみ

供米完遂が鬚ぼう〳〵の父と家族　佐藤厚吉

麥芽ばえ血のやうなとさかを振る鷄

朝戸いくつも繰るまだ陽を見ぬ雪の庭木　高田千代子

山路雪ふめば青空に爆音　德山芳太郎

氷の上に淺間の灰がつもつてゐる　瀧田光雄

炭をやくかまどに近く炭の丸太　齋藤喜平

雪の日うまやに入れる乾いた藁　猿井優太郎

そよ風にふと足が止る木影　紺野晃晁

草の香す少女麥刈る朝の遠出す　横山吹笛

腕の血管あらはペンをはしらすに暑き　廣田葉蘭

この花白く銃劍とる日までのわがいのち　高橋啓

園作るに電休一日の空は五月晴だ　增田雨滴

窓にゐてつばめが飛んで一日を私の務め　若月靜江

君歸るとめるも無理に青葉夜の影す　宮本愛子

○井泉水選

暮れてもさやさやと青い風月から客が來る　水谷青史

梅雨も晴れると雲のとぶ空の爆音

よし切疎開の車とめて畫にする親子らしく

吾子はたけする程になり今年諸苗のまだ植わる處　瀧山重三

道しるべには月の照り雲があられこぼしてゆく

二階から木にある抽子の海が雨

寒い雲が月を追つかけてゐるあられあられ

あまだれの音も春が來る胸に氷のせてゐればよ　山本木天蓼

木の葉散る晝の溫泉の透明

船がつくと島の童ゐてその家が紅葉の中

冬の日こぼれゐて米の一粒一粒

自轉車でゆく春あさき小松原など道　平松星童

春になる木の枝に星がはさまつてゐる

はりがれが冬の月の光になつてゐるので戸をしめる

いくらか日ののびたことのちやぶ台のあしを折る

ぼんやり月が仕事終つた綿打機械

大寒あたたかくお城の水に浮いてゐる鳥　東松八洲雄

すぐきの雜炊も京らしくせせらぎ春近く

日の入り處も富士へ落ちる日の少しのびたやうな夕餉の煙　佐伯美則

硝子越しに雪、椿の花の赤いお茶をいただく

雪に月の出て枯木が月夜の道　渡邊燕兒

山も海も唯もう冬の、汽笛が海で鳴る

雪がくらくなるとボンボン時計

寺が一つやがて花も咲く頃の月夜である

歌つては日暮れ、日暮れては行く　里井正子

霜あさ線路が二本と道が向うにも人がゆく

月のあかるいつるもどき

かんのゐくい日もあれば陽ざしの佛のりんごのつや　内久根聖己

畑とし畑になつてゐる雨が春になる雨

屋根に降り海に降る雨が春の雨

雪の遠山に日の當る二月海の青く此の日征く　澤木正

かぜ、くろいマントでいつぽんみちをくる

ふるでもない冬空の小川の底をすくつてゐる

街の冬がここは映畫館の繪看板と待避壕の口　佐藤專子

馬つれて父と娘と冬の山へゆく

冬陽の一さう靜かに碇泊

大寒ンあをあをと草背負つて來る日暮　皆川蓼二

ひるを灯せば氷室のやうな針に糸通す

先祖からの石臼を回いて戰時下の此の麥の粒々　小田島義

山ひとつ向ふの汽車の笛がきこえて星が冬

あかざ枯れつくしたる莖の赤さがいよいよ寒ン

焚火どつち向いてもけむいので後ろむいて麥畑犬がゆく　植田市龍

お日樣山を一めぐりするともう暮れる杉山炭燒小屋

橋はショールかけた娘さんも通る元日の潮が滿ちてゐる

遠くに一つ灯りやがて月の明りとなる枯田の道　名雪理輝

乞食たべるものもちて正月風吹く方へ歩く

だいぶん伸びてきた日の入りぎはの麥の芽

枯芒が少し新年といふ日が射してゐる　木庭皓龍子

ふる雪少しつもり柿の枝が月夜になる

ばくおんも寒い日角帽買つて歸る

月夜が凍る白い雲を縫うてゆくもの　木村飛棗子

月の冴えきばまり石の照り　青木菁華

松の奥ふかく鳥居見えて雪のある松　法雲寺三郎

濡れ縁には梅と梅もどきの鉢雪のつもり　高本三蕗

春近い枯枝並んでゐる飛行機が描く雲で　長山林二

電信打つ音の郵便局が街角春のくも　日向野秀策

雪をうつして流れてゐるやなぎが猫をつけた　村瀬汀火骨

橋のあつて街の小屋根の雪げしきその雪をふむ　岡野宵火

水音は水車がまはるふるさとへかへつてゐる　木村飛棗子

屋敷うちは柿の木と梅の木と梅はつぼみ　芦立陶抄子

雪からしづくする日のさして繩なつてゐる機械　佐藤康治

警報あとのラヂオ音樂が寒月と雲　塩崎寸南夫

毎日警報の、飛機來ない夜の蜜柑の味　岡田琅玕

雪に椿の花、君も征く　武田桂

銀行の扉はいつも灰色でことし二度目の雪　櫻田悠子

いつもの杉の木にいつもの小さい星、ちいさい童べたち　落窪京太郎

飛機去つたあとの滿月梅の枝つぼみ

芽ぶきそうな月夜へお嫁さんモンペ姿で

木の芽うすみどりの星になる

春山、人が通るので夜明けてゐる

本の根に寄せてある雪のバスを待つてゐる

雪のせた屋根の星が出て春

鍛冶屋二人で打つ一人で打つ朝がまだ凍てゐる道

岩に雪松に三日月が小袖橋といふ橋

雀巣にもどりつらら少しとけるほどの夕日で

夜は雪あかりのいで湯の入口やなぎ一ぽん

一群の枯れあしが集つてゐると日が落ちてゐる

月がきれいな手袋した女の子の手をひいてゆく

暮れてしまつて春の星

よく燃える火で又雪になりさうなほほかむりする

桃が咲けば櫻も、防空訓練終つたお茶にする

感謝と敢闘これが學校の標語、に櫻咲いてゐる　佐藤逸仙子

こんばん雪になりさうな雲が煙突の尖、流れてゐる
月、すこしはなれてあかるい星、風がでてゐる　三浦香女

解除となりて椿ひつそりさいてゐる冬
泊りて山から水が流れてくる朝　平岡國次郎

蛙の聲、燒跡は蛙も鳴かぬといふ葉書そこにおく
庭のいちごの赤らむころの富士の雪がちよつぴり　青應香

騎馬の一隊が正月二日の霜どけてゐる道
夕日は運河の波にゐる鳥の寒い正月　井形春一

裸で裸の子をだいて蜘蛛が巣をつくつてゐる
厄日もどうやら過ぎた稻田稻の花毎日爆音　上野忠三

白いうめ紅い梅咲いて傷兵さん朝から歩行の練習
富士が晴れつづく正月二月坂の上あさあさ通ふ　大山冬石

冬木に星が遠い川音がまいばん
ここに着いて雪げしきの旅人御宿　關口江畔

山から日が出る雀のかほの寒餅をつく
鴉は鴉の歸る方へ歸る雪ぞら　藻谷草土史

雪の足跡一々拾つて行く朝日
雪はれて高い空竹馬で聲かけてゐる　角田重信

月が林をぬけてはゆく、冬
まだ雪のあつてまいばん月の照る　夏堀望子

池の薄氷僧は素足で掃いてゐる
このへん古戰場の、今も戰時の梅のかたきつぼみ　小原甲陵

降り止んで月夜のかたい雪の上警報傳達
屋根の高さに雪みちの枝許りでてゐる枝の小鳥　高橋政二

降るだけ降つて山から月夜の屋根の雪
凍雪(すみ)に乘つてゆく村の子供かたまつてゆく　武鑪青杏子

消えては積るほどの靜かな薬のなかの實
枯草午後はあたたかな流れの音する　高橋一洵

どんぐりの珠數もつて旅をゆく
さざなみの葦の芽

雪かぎりなき雪松林少し見えてゐる　太平成正

年の終りの月夜松の影人の行き來　三輪薫

青い空に梅さいて祖母の三周忌とて　川上湧泉

白梅、つきよの戸をしめます　佐々木行人

洗うて白い冬の野菜も疎開學童共炊所

警報は解けないままの三日月枯枝

近道して丸木橋のある春　齊藤青圃

木立はるかに春が來かけてゐる入日のあたり

冬の山の樹の匂ひの鋸一枚　洲河仲一

牛が草靴はいて來る春の遲い枝の芽

防空頭巾にけさは雪のふる學校へゆく　三浦清一

竹やぶ夕日のうぐひすが鳴いてゐるふるさと

松葉牡丹にも水打つてある大きな蟻が歩いてゐる　平賀星光

白く富士の大きく貝細工の赤いの青いの

夕日部屋の奥ふかくさして今日節分

大艦隊近づけりと如月晴れて寒し　横關碧樓

鬼打豆もう打つ聲とうちは豆を炒る

さしでた枝が積んであるまきのうへの冬の芽　石原元寛

冬の日梅檀の實、島の子供が學校からひけて歸る

芝居の幟がヒラヒラと島の娘さんたち麥踏み　長塚台一郎

ふりたらぬ雪がふつてきた石臼ひびかせてゐる

落葉の下に草が芽をふく落葉を掻く　堀切春扇

町はラヂオ、花屋さんの花と娘さんです

どこまでも花になる空の爆音

はすの葉はすの花月夜　吉村したり

雪のせせらぎの青いものを摘む

大き松の根掘り上げたるしづかに夕映えるかな

松の根の脂染みしこの手お茶をいただく　菅崎道雄

くれると春の月、大工さんが殘していつたかんなくづです

沖縄へ急ぐ爆音か春は紅くさいて　中西國友

山に行けば木の匂ひずうこずうこひいてゐる春

星のくらひゆきのこみちがとほれる　御井弓弦

竹の中から竹槍にする竹一本きつてきた　阡陌多代

洗はれて雨ためて白い貝殻春の雨ふる　塩田正吾

澄みて青さは夕空の草にゐる虫よ　吉川哲男

風車しづかにまはる風の白い服の女學生で　加藤黛杉子

けむだしからでてゐる煙も雨やんで芽ぶきさうな　谷雨滴

山は春雨、桑の芽が晴れとる　梶本芦城

芽が出てゐる箱土蟻が出てゐる　矢島寒雄

櫻を散らした雨のあと青い山の線　重村孝順

浮いて冬雲の、時計台の上にある旗　胡地左志

古い椅子に冬海のちよつぴり遠くにある風景　能智愛子

梅も殘り咲きの畦道の梅が五六本　肥田案山子

兵として征かず春の日人を訪ふてゐる　印南健治

蚊帳はつりかけしておいてあぢさゐに雨　福本逸子

わらびでそめて一ぷくしてゐる　關根ふさ子

おち椿上つてゆくと病院の横をゆく

米とぐ水にも散つてゐたよ

ヲカメ乾してゐるヲカメ籠にもある海のいろ

山を割つてゐるに陽のさし入りたしかに春の日

雪の桑畑の桑の影家を尋ねてゐた

暮れなずむ春遠山を眺めてゐた

臥する日の多く起きてゐる日は桐の花散つてゐる

にほふもののアカシヤの花でせうか籐椅子

雨が來る池を敲いて通りゆく夏

穂に風が波のやうな木の葉が蝶のやうな昏れて通る

燒跡にもう春が雀が餌を捨うてゐる

代書屋の顏を載せた机一つと春の鳥籠の鳥

風のあとの雨そのあとの靜けさ木の芽

緣談雪柳の芽の青さに坐る

いい月夜の月が芽をふく枝で

小鳥餌を捨ふさまも父母に仕ふる日日好日

會へばもう別れの友と水が春になつてゐるさざなみ　森景諫郎

枯草のぬくみが芽吹く空のそらいろ　鈴木單衣女

敷石雪のむら消えてゐる祈念する　石川舟洋

梅、薪背なに負ふと散ります歸ります　佐藤龍

トマトの苗植ゑて警報解除の夕べ雲のある空　東信太郎

ゆくほどに藤の花の見えかくれ水音にそうてゆく　菅無極

つぼみもやはらかく煮えて春の菜幼く坐つてゐる　上山榮一

ふた親のないことが湯豆腐の白い味です　蓮見牛里

病人掛時計のねぢのゆるみなどいひ退院ちかく　川口雅子

白衣の列並木の芽前うしろ交互に唄ふ　星島芳子

行く荷車も荷車も疎開の寒い橋夕日　梁瀬阿羅與

念々疑はず芽ぶく木を見る　水谷智彦

雀散らばつてみんな日向の寒雀です　憶良無月窗

人の遠くあると想ひつつ若葉このごろ　栗田千可志

大きな桐の木の桐の實鈴なり白雲　八重田保朗

特攻隊のことなど花が散ると青い樓で　酒井健之

淺間の煙冬空の一方晴れてゐる　小島胡市

ちいさいちいさい飛機柿の木に登つてみよう　水田潤

としより二人の寒さもう黄梅が咲きそう　高本三松

村から村へゆく橋が水潤れてゐる

郵便やさんとけふあたたかな山のくも

警報があつて、足袋をぬぐにふと春が來てゐる

うぐひす、朝の厠にゐて雨晴るる

日があたる椿の木なら咲いてゐる

子供たち讀むものがある日向で冬木で雀のこゑ　土居生波

野火してある日の中風少しある堤を歩く　瀬戸照子

野草もこのとき空に爆音ワラビを取る　久木野英麿

爆音は去つて夕べは明るく麥畠青く　伊達宗勝

霧ぬれた皮革の匂ひ出港する　上田正隆

少し行けば少し逃げるよしきり、よしの芽　辻村追鳥子

リンゴの花の芯の紅夕陽落ちしか　肥村鯉漾池

たしかに藪うぐひすの、警戒警報解除です　眞野たける

月が出て粉雪散らすも厳しい寒　廣田路一

月光、木に銀色の蟬がゐる　平松山生

私達が今までに語つて來たことは、俳句は「生活の表現」であることを强張して來た。この言葉は色々に解釋され行なはれて來た。一番間違つてゐたことは「生活俳句とは散文律による思想の表現である」かうゆう言葉である。かくの言葉がなされた元は、作句された多くの俳句を分析して歸納的の內容を受取つたことによるものである。即ち、昔の生活派俳句がそれである。この提言が私達の主張ではなかつたと同樣、「俳句は花鳥風詠である」と云ふ言葉も正しくなかつたと云へる。それは思想的な面が少なく、對象を花や雲やに取題するものが多かつた爲になされた言葉であつて、やはり既成作品を分析歸納しての結果であつたことは同樣である。

日本の現實は今や大轉換が行なはれつつある。俳壇に於ても大轉換が行なはれつゝあり、生活俳句は正に花鳥風詠へ切り替へられつゝあるようである。こゝに於いて私達が反省を要する事は、戰爭が終つたからと云つて急に氣持を花鳥風流へ轉換することが出來ない如く、益々戰爭の結果を反省する日常生活からは、今後の希望なり理想なりの顯現せる作品こそ生れても、社會現實から遊離せる花鳥風詠俳句の生れよう筈がないことである。眞の生活俳句とは、戰爭中は戰爭一點張り、大平と切替はれば急に仙人然と實生活から外へ飛び出したようなものを作る流行的作句意識を持つものではない。又、作句の取材は山もあり、川もあり、自然を取り入ることに決して不都合はないことを考へる可きであらう。

（卍禪子）

編輯後記

○本誌の發刊に當つて各方面より多數激勵の手紙をもらつた事を先づ御禮申上げる。再刊とは云へ新誌の創刊と同樣な努力をせねばならなかつた。我らは敢然と現下の怒濤を乘切らなければならない。

○今月は遲刊を取返す爲と連絡に時間を要する意味から、評句欄を取止めた。今後は何時發行不能の問題が起るかも知れないが、編輯部は色々に手を打たふと對策はしてゐる。然し、諸君の原稿が手元になくてはどうしてみようもないから、この意味でどしどし送稿して置いてもらいたい。

○本誌は心の糧として廣く各方面の新購讀に應じ度い。反面、用紙の節約と云ふ矛盾した實狀から、先號より御覽の通り減頁をした。その上、購讀料金も改正といふ狀態にある。それ故、今後は僅少な頁數の中に出來るだけ豐富な內容を盛つて、我らの使命達成に邁進しなければならない。

○減頁の結果は編輯もやりにくく成るであらう。然し、當初の俳壇新秩序の建設と云ふ意圖は、「みいくさ集」刊行以來既に基礎的な仕事はほたし得たと云へよう。今後は讀者本位の樂な性格のものに仕上げたいと思つてゐる。この點讀者各位の御支持を得るならば更に內容も充實し、もつと發展的飛躍も決して困難ではないと確信してゐる。新俳句壇は最早黨派的對立はなくなつたのである。

○本誌の一月號は不着の所が大分に多く目下調査中である。念の爲に申上げて置きたい事は、萬一本誌の發送不能の場合には、地方に仕事を移し何んとか善處したいと思つてゐる。發送に就いてもぎりぎりまでやつてみる積りであるが附近書店の店頭から直接購讀するのも一方法であると思ふ（中禪子）。

投稿略規

○俳論、隨筆等（なるべく簡潔なるもの）

○俳句日本作品（俳句日本社々選）句數十五句以內、楷書にて淸記居所、氏名を詳記のこと。

○選句錄作品

荻原井泉水選のもの神奈川縣大船町建長寺前荻原井泉水へ

中塚一碧樓選のもの世田谷區上馬町三ノ一〇五〇中塚一碧樓へ

西垣卍禪子選のもの足立區伊興町狹間八八七西垣卍禪子へ

○句數十五句以內、楷書にて淸記、居所氏名を詳記のこと。

○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一月一稿一選者に限る事。

一、締切　毎月十五日

一、購讀誌代の拂込は從前通り舊各社の發行所宛に小爲替にて願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本」社へ送金せられたし。

本誌定價

一冊分　金八十錢（五送料錢）
六冊分　金四圓八十錢（一冊五錢）
十二冊分　金九圓六十錢（同）

○前金（なるべく小爲替）で御拂込下さい。

○必ず何月號よりと御指定の事。

○御轉居の際は發送部宛御報下さい。

第一卷　第十號
昭和二十年六月廿五日印刷納本
昭和二十年七月一日發行

發行人　中塚直三
編輯人　西垣隆滿
印刷人　石上利雄
東京都立川市曙町三丁目五五番地
印刷所　行政學會印刷所　東京五

東京都足立區伊興町狹間八八七
發行所　俳句日本社　日本出版會會員番號一二五〇〇四
配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

定價金八十錢